

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4073000426
法人名	株式会社ウェルフェアネット
事業所名	グループホームさわやかテラス (ユニット名 1階 2階)
所在地	福岡県筑紫野市俗明院1丁目13番5号
自己評価作成日	令和6年9月30日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&JigyosyoCd=4073000426-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	公益社団法人福岡県介護福祉士会
所在地	福岡市博多区博多駅東1-1-16第2高田ビル2階
訪問調査日	令和6年10月25日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

グループホームさわやかテラスは、平成13年開設し、今年で24年となる。隣には平成21年6月開設した小規模多機能型居宅介護事業所「さわやか憩の家二日市」があり、協力体制も取れた場所となっている。「あるがままに 楽しく ゆったり」という家訓のもと、認知症になっても、その人らしい暮らしを柔軟にサポートしている。また、認知症に特化し専門性をスタッフ一人一人が学びながら日々のケアに取り組んでいる。平成29年2月からは認知症カフェ(喫茶いこい)を事業所内で行いながら、地域の方々とって、いつでも立ち寄れる温かい空間と場所を提供している。移転して三年半が経つが今までと変わらず地域の行事などに積極的に参加し、地域との繋がりを大切にしている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

平成13年4月に開設、建物の老朽化に伴い令和3年4月に新築移設している。開設当時の入居者と共に作った家訓「あるがままに 楽しく ゆったり」を大切にしている。鍵を掛けないケアを実践しており、スタッフがお互いに協力し合いながら入居者の行動を制限しないように心がけている。玄関前にベンチを設置しており、ゆっくりと花壇の花や野菜を眺めることができる。代表者や責任者、スタッフはお互いに信頼関係がありスタッフは活き活きと働いている。事業所の「入居者に寄り添う姿勢」「入居者中心の姿勢」に感銘し「自分の親もいずれここに」と考えているスタッフもいる。退居後も事業所に尋ねてくれる家族もある。以前に利用していた家族や地域の方の紹介による入居希望も多く、今後益々地域や家族に求められる事業所として期待される。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印	
58	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	65	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
61	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:30)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー)＋(Enterキー)です。〕

自己 評価	外部 評価	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	家訓「あるがままに 楽しく ゆったりと」、入居者の望まれることに耳を傾け、寄りそった関わりに取り組んでいる。またスタッフの心得に沿った行動を心がけている。	設立当初、スタッフ・利用者と共に作り上げた「家訓」には思い入れがあり、家訓を細分化しスタッフ心得を作成している。スタッフは「あるがままに楽しくゆったりと」を常に念頭に利用者と接し、月一度のスタッフ会議やカンファレンス時に共有し振り返りを行っている。家訓は年に数回発行するお便りの表紙に掲載している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナで減ったが、地域のお祭りや清掃活動・季節行事への参加・サークルへの参加・認知症カフェの実施をし、地域との繋がりと交流を大切にしている。日頃からの地域の方との挨拶を大切にしている。	事業所の建物の老朽化のため令和3年4月に現在地に移転している。移転前から地域の方の理解があり、夏祭りや地域の行事にスタッフ・利用者が参加したり、ゴミ拾い運動にはスタッフが参加するなど地域の一員として交流している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	商業施設、地域の方々に向けて認知症の理解、支援を深める為に取り組んでいる。地域運営推進会議や認知症カフェ(喫茶いこい)、認知症サポーター養成講座の講師や専門家として参加し発信している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	現在は集合とzoomと両方で出来る様になり、研修報告・ヒヤリハット・入居者のご様子をお伝えしている。参加者のアドバイスを聞くことで自らのケアを振り返っている。	今年度から主として対面での会議を行っている。出席が難しい場合はオンラインでの参加としている。会議では事業所の現状や研修、ヒヤリハット等を報告している。参加者から転倒に関して「椅子を置き掴まる所を作ってはどうか」との提案を受け、改善した事例がありサービス向上に活かしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	主には地域運営推進会議を通して、市や社協などと情報共有できている。悩みを共有したことから、市主催の面談会の実施に至る。	運営推進会議に市の職員の参加もあり、事業所の実情や取り組みを伝える機会がある。市役所訪問時には担当者に声をかけ現状の報告をしている。介護人材不足に関しては市が就職面談会を開催することになり、10月、11月に参加予定である。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービスにおける禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	日中は玄関を施錠していない。身体拘束廃止委員会や高齢者虐待防止委員会で話し合った内容はスタッフ間で共有している。日頃から自分たちの言動を振り返り、言葉や薬による身体的な拘束をすることのないように意識して行動している。また、社内研修に参加し拘束しないケアに取り組んでいる。	防犯上18時～翌朝8時半は施錠し、日中は鍵を掛けないケアを実践している。入居者の外出希望があれば、スタッフは協力しながら意向に沿って支援している。月1回法人の全事業所の委員が参加する身体拘束廃止委員会があり、内容を全スタッフに回覧し共有しており、身体拘束に該当する行為を理解している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	社内外の研修で学ぶ機会があり、虐待防止に努めている。また「高齢者虐待防止委員会」を設置し各事業所でスタッフの何気ない言葉や行動でご本人がどう受け止めているか、精神面の虐待をしていないかを考えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	外部講師を招いたり社会福祉士によるDVDなどで日常生活自立支援事業や権利擁護、成年後見制度について学ぶ機会があり日頃のケアに活かせるようにしている。カンファレンスで話したり、新入職員が学べる機会をつくっている。	スタッフは年に1度パソコンを利用し、1人ずつ視聴研修を行っている。視聴後は報告書を作成し提出している。職員は権利擁護に関する制度について概ね理解しており、必要性が感じられた時は責任者に繋ぐようにしている。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居前には本人の自宅や生活のこだわりを聞き取り、入居時は本人と家族とに心配がないか尋ねている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族会では家族同士意見交換できる場がある。また面談時などに要望を伺えるような状況がある。LINEやリモートでの面も積極的にご案内している。また、家族とのやり取りをスタッフが回覧できるようにし、頂いた意見を改善したり、検討したりしている。	利用者の意見は日常生活の中で発せられる言葉から把握し、可能な限り反映させている。家族会があり、会の中で家族の意見は表出しやすくなっている。責任者・スタッフは話しやすい雰囲気づくりを心掛けている。入院後、事業所に戻るか他の介護施設に移るかの相談にも家族に寄り添い対応している。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日常の小さな疑問や意見を言える環境が作られており、責任者に報告したり、チーム会議やカンファレンスで意見や提案を発言できる場所がある。スタッフ全員に内容が行き届くように回覧ファイルを作り、他事業所の取り組みを見れるような仕組みがある。	代表者・責任者とスタッフ間には信頼関係があり意見や提案を言いやすい雰囲気にある。パートのスタッフが時間外に業務の振り返りを行っていたが、その事について常勤職員より責任者に相談があり、時間内に終了できるように改善された事例がある。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	スタッフが向上心を持ちながら働けるように、生活状況の把握・助け合い・思いやりのある職場作りを心がけている。子育て・介護など様々な環境に対応できるように、条件を見直している。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また、事業所で働く職員についても、その能力を発揮し生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保障されるよう配慮している	年齢性別、職歴、外国人も関係なく採用され個々に合った働き方が出来ている。スタッフ教育もあり長く働ける環境を作っている。スタッフのプライバシーに配慮し、個々の気持ちを尊重している。	年齢や性別等で採用対象から排除をしていない。家族の都合での勤務時間の変更等にも対応がなされ働きやすい環境にある。経験年数に応じ社外研修への参加の機会もあり勤続10年のスタッフには全員海外研修への参加も用意され、家族も一部負担で一緒に参加可能である。スタッフはそれぞれの能力を発揮し生き生きと勤務している。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	人権教育、啓発活動は研修を行っている。また社内に認知症コーディネーター養成研修を受講したものがおり、カンファレンスなどで話をすることもある。	年に一度、全スタッフは研修を受け報告書を提出し回覧している。相応しくない支援の場面を見受けた時には、責任者やスタッフ間で注意をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	経験年数に合わせた社内研修や外部からの講師を招いて研修を受ける機会もある。講演会など社外研修にも定期的に参加している。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	県のグループホーム協議会に所属し、研修や会議を通じて相互に意見交換ができています。また地域の交流会などにも積極的に参加している。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	契約時に自宅に伺いこれまでの暮らしや拘りをじっくり聞き取りしている。持ち帰った情報は、入居前に全スタッフで情報共有している。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前は自宅・入院中であれば病院へ訪問し関係づくりを開始する。生活環境が変わっても本人らしい暮らしの継続できるように、ご家族にもアセスメントシートを渡してケアの参考にしている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前に生活されていた場所に伺い、どのような生活されていたのか、どんな事に困っておられる様子かを実際に見て考えている。本人や家族の望まれる支援を聞き取り、安心して過ごして頂けるように心がけている。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	スタッフの心得を意識し、本人の気持ちに寄りそう立場になって考える事に努めている。日々の生活で、本人が出来ることはしていただき、出来なくて困っていることにアプローチする視点に注目している。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	日常の様子や表情、言葉を記録しご家族に共有することで共に支える関係を築いている。本人がご家族に伝えたくても伝えられないことは代弁し、関係が壊れないよう、専門職として橋渡し出来るように心がけている。テラスに面会に来られた際はゆっくり家族との時間を過ごせるように配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人が大切にしてこられた習慣や親交のあった方との関係を継続できるように、電話や面会ができる環境を作っている。また自宅のある自治会の行事に、一緒に参加することもある。	スタッフは入居者が家族と共に週1回自宅に帰る際の支援や、馴染みの場所への外出に同行している。友人への電話の支援や馴染みの方へ葉書を書く時はスタッフが葉書を買ってきて本人と一緒に投函している。自宅が事業所の校区にある方とはスタッフと共に自治会の行事に参加することもある。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	個人の生活リズムやお気に入りの場所は大切に、プライベートな空間は保っている。一緒に過ごし楽しみが共有できるようにご本人の気持ちに寄りそい、さり気ないケアをしている。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	話を伺い、相談を受け付けている。契約終了やお亡くなりになってからも広報誌を定期的に送ったり、初盆参りに伺っている。家族からお手紙など返事を頂き、関係性が続いている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の言葉だけでなく、表情や身体の動きなども具体的に記録して、本当はどう思っておられるのか想いをはせる努力している。困難な場合はより良い支援に繋げるため、スタッフ間で意見を交わしたり家族にも相談している。	入居者と話をしやすいよう関係づくりを行い、知り得た情報は端末機に記録しスタッフがいつでも閲覧できるようにしている。自分の思いを伝えられない場合は、家族との「やりとりシート」を活用し、以前の情報をもとに寄り添うことができるようにしている。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	契約時や訪問時にご本人やご家族にもどのように暮らして来られたのかアセスメントシートに残し、共有している。また自宅にも伺い、生活のこだわりを把握している。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の様子を記録してスタッフ間で共有している。表情や気持ちを汲み取れるよう、その方の「今」を大切にしている。心身の状態や表情の変化に気を配っている。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	チーム会議やカンファレンスだけでなく、日々の変化や気づきをスタッフ間で共有し、家族からも聞き取りし、その方の「今」に合った介護計画が作れるようにしている。	担当するスタッフを中心に入居者の状態や意向の情報に加え、家族と意見を交換しながら介護計画を作成している。遠方の家族へは電話やメール、郵便などで意向の聞き取りを行っている。また、往診時等で医療関係者からの情報も得て現状に即したものになっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	本人の表情や言葉・様子を記録に細かく記入し、気づきを優先課題として活かしている。何となくちがうの何となくを大事にし、小さなことも注目する努力をしている。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	訪問看護や訪問歯科、病院受診の付き添いなど柔軟に対応をしている。「たまには自宅に帰りたい」という方がおられ、週に1回ご家族と一緒に帰られている方もおられる。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	感染症対策を十分にし、地域の催し物(盆踊り、歌会、さくら祭りなど)に参加している。自治会との関わりを大切にしている。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	月に2回の訪問診療と半年に1回の定期検診で全身状態の把握をしている。みとりの不安な時期など、いつでも家族やスタッフの相談にのり必要に応じて速やかな紹介も対応できている。	本人、家族の希望したかかりつけ医となっており、全ての入居者が協力医をかかりつけ医としている。定期往診や随時での対応等、24時間での支援体制が出来ている。歯科の定期往診もあり、希望者は受診でき本人・家族が安心できる体制である。他科受診は、家族やスタッフで対応しており、日ごろの様子が医師に伝わるようにしている。	
33		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	いつもとは違うと感じたら速やかにスタッフ間で申し送りを行い、併設事業所にいる看護師やかかりつけのよこみぞ医院と連携をとり、アドバイスを頂いたり、相談できる環境となっている。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	SWと連絡を取り合って、入居者の円滑な入退院を支えている。また入院中は定期的に病状や様子を聞き、可能であれば面会している。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人・家族の想いを汲み取りながら、終末期について支援を行っている。また、スタッフ間で統一したケアをしっかりと行えるように情報共有している。みとりのガイドラインがあり、最期に向かつて話し合う機会がある。その都度気持ちが変わるため、確認し尊重できるよう努めている。	事業所設立してから数多くの看取りを行っている。利用開始時に看取りについての説明を行っており、状態により変わりゆく気持ちをいかにキャッチできるかをスタッフ間で常に検討している。看取りに関しても責任者等に相談できる体制ができており、家族が泊まる際の部屋の準備もある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	BCPに沿った訓練の中で応急処置や初期対応の訓練を計画している。 急変時はスタッフ間で共有・医療従事者への連絡を心がけ、対応している。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防災担当スタッフを中心に毎月の防災訓練を実施している。だれでもいつでも災害時に行動が出来るように物品の場所、種類、個数などを定期的に見直して周知している。 県外の事業所と災害時相互支援協定を結んでいる。	年に2回の火災訓練に加え、事業継続計画に沿った地震や水害などの訓練を毎月1回行っている。防災委員が備蓄品の管理も行っており、保管場所や避難場所についてスタッフへの周知ができています。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者の自尊心を傷つけないよう、常に「自分だったら」と置き換え、相手の立場に立って考えている。声かけするときの声の大きさも配慮している。入居者やスタッフを呼ぶときは「さん付け呼称」の徹底をしている。	事業所は言葉遣いを大切にしながら支援をするようにスタッフ間で共有している。何事も説明と同意を得て行動するように徹底されている。プライバシー保護の観点から、トイレへの声掛け時には小さな声で耳元で行うなど配慮している。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々の中で自己決定ができるような声かけを心がけている。毎日の献立づくりの際に希望をきいている。日々ご本人の言葉を記録し、実現可能であれば希望に沿えるように支援している。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	スケジュールを決めず今の体調や気分に合わせて関わりをしており、本人主体の生活が送れるように心がけている。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	スカーフやパーマなどご自身が好きなものでこれまでのようにおしゃれを楽しんで頂けるように支援している。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	基本スタッフが献立を立てるが、入居者に食べたい物を伺って立てることもある。食材切り、つぎわけ、食器洗い、食器拭きなど夫々が出来ることをしていただいている。また要望で畑づくりをし食を楽しめるようにしている。	入居者は食器を洗ったり、拭いたり、スタッフと共に食材の買物に行き、旬のものを目にし季節を感じたりしている。敷地内で野菜を育て収穫したものを食するなど工夫している。食事の際は、できるだけ本人が自身で食べられるよう声掛けや見守りを行い、食事を楽しむことが出来るように支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個々に合わせて高カロリーゼリーや水分摂取のためのゼリーなどの準備を行い体調維持に努めている。また、ご本人が食事をしたいと思うタイミングで食事をお出ししてる。食事量や刻み、トロミなどその人に合わせて対応している。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食事前後に口腔ケアしている。 口腔内の状況に合わせて訪問歯科医、衛生士からアドバイスをいただき実践している。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	本人のサインをよみとりさりげなく、声かけしトイレでの排泄を促している。 ご本人にもスタッフにも負担がかからないよう2名でトイレに案内したり、ご本人に合ったパットやパンツの検討もしている。	本人の排泄リズムを端末機に記録することでスタッフが把握でき、声掛けやトイレ誘導を行っている。間に合わなかった場合には、スタッフ間で原因を考え検討している。紙パンツから布パンツとパット併用になった事例があり、自立に向けた支援を行っている。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	トイレに座ることを基本とし、水分補給は気がけて行っている。また、必要であれば下剤の検討をしてかかりつけ医に相談している。また、食事メニューに便通が良くなる食材をいれている。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	時間を決めずに、出来る限りご希望に応じて入浴していただいている。また体の状態に応じてリフト浴やシャワー浴を利用していただいている。	自宅で入浴しているようにとの本人の意向に沿った支援を行っている。脱衣室で音楽をかけたり、温泉気分を味わってもらえるよう温泉マークのついた暖簾を飾るなど入浴したいと思うような工夫がされている。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	寝具類の清潔、室温調整、湿度調整などに努めている。ご本人の表情、身体状態をみて休みたいときに安心して眠って頂けるように心掛けている。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	入居時に家族からの聞き取りとかかりつけ医への受診時に検査した内容を把握し薬の内容と目的を把握している。日々のバイタルチェックをかかりつけ医と薬剤師とも情報共有し変化があれば対応できるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	喫煙やアルコール、趣味、日課にしていることなど個々の生活歴に合わせ、可能な限り継続して頂けるように支援している。本人の出来ることまでスタッフがやってしまうように心がけている。		
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	日中は鍵をかけず、ご本人の思い寄りそってドライブ、買い物、外気浴、散歩に付そっている。その時の本人の言葉を記録し、体調に考慮した上で出かけられるように支援している。	日頃から利用者の意向に耳を傾け、近くのパン屋やコンビニエンスストアに好きなものをスタッフと共に買いに出かけたり、玄関前のベンチで外気浴を楽しんだりしている。たまに、衣類を買いに大型ショッピングセンターにスタッフと外出することもある。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	食べたい物や買いたい物があるときは要望を聞いてスタッフが買い物を代行している。お誘いし、一緒に買い物に行くときもある。お金やお財布を持つことで安心に繋がる方は少額を持って頂いている。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご本人が家族の声が聞きたくなったら、家族の了承を得ていつでも電話をかけられる状況にしている。お手紙を書きたいと言われたら一式用意して一緒に投函しに行くこともあった。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	リビングに日めくりカレンダーをかけており、めくる際に月日の声かけしている。季節の花を飾り、旬の食材を料理に取り込んで季節を感じていただけるようにしている。床やテーブルなどの清掃もこまめに行い生活空間の清潔保持に努めている。	白い壁が明るさを醸し、窓は大きく目の光が差し込んでいる。床や居室のドアは木目調に統一されており、穏やかなゆったりできる空間になっている。リビングには大きなソファもありテレビを見たり洗濯物を畳んだり各々のペースで過ごすことができる。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	入居者同士意気投合されている時は、状況に合わせてスタッフの過度な関わりは遠慮している。それぞれが思い思いに過ごせるように環境作りをしている。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	馴染みのものに囲まれて安心して過ごして頂けるように使い慣れた家具やお仏壇などを配置し、居室の時間も充実して頂けるように努めている。	壁面には利用者や家族の笑顔あふれる写真を飾っている。本人手作りの作品や仏壇は、以前住んでいた場所と変わらないように配慮された配置となっており、安心できる空間となっている。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	テーブルの配置を変えたり、手すりの無いスペースには椅子を並べて背もたれを掴んで歩けるように等の工夫をしている。また、トイレや居室の入口に分かりやすい表示や表札を掛けている。		